

## 「交流ネットワーク構築の現状と将来」

国際企画委員会国際学術協力部会  
平成 19 年 6 月

(社)日本船舶海洋工学会・国際企画委員会国際学術協力部会では、日本財団助成事業「国際学術協力を係わる海外派遣」報告会の第 2 部としてパネルディスカッションを企画した。これは、派遣者が海外派遣により受けた印象や体験についての生の声から、これまでの船舶海洋工学分野や学会への貢献の度合いや研究者の交流ネットワーク構築の現状を把握し、今後の交流ネットワーク構築の進め方がいかにあるべきかを討議するために、パネルディスカッションのテーマとして「日本人研究者の海外における存在感」を取り上げた。報告会では、フロア、パネラーと討議を盛り上げるため、事前に派遣者にアンケート調査を行い、アンケート集計したパワーポイントを適宜フロアに提示して討論を行った。

### 2006 年度「国際学術協力を係わる海外派遣」報告会概要

開催日時：平成 19 年 5 月 25 日(金) 9:20~10:40

開催場所：池袋サンシャインシティ文化会館 7 階 (第 7 会場)

第 1 部 派遣者報告会 9:20~10:10

第 2 部 パネルディスカッション 10:10~10:40

司会：高木 健 (委員)

議題：日本人研究者の海外における存在感

パネラー：

- 橋本 博公 (大阪大学)
- 湯川和浩 (海上技術安全研究所)
- 大石 桂三 (三菱重工業株)
- 久間 康充 (三菱設計株)
- 千賀 英敬 (大阪大学)
- 前田 克弥 (海上技術安全研究所)
- 黒田 貴子 (海上技術安全研究所)
- 松尾 宏平 (海上技術安全研究所)

テーマの背景：

本事業は若手研究者・技術者の活性化および学会・造船海事関連産業界の活性化を目的とする海外派遣事業として発足し、下記をテーマとした報告会を続けている。

2002 年 5 月、海外派遣報告会

- ・第 1 回派遣 (2001 年度) メンバー中心に若手応援団結成
- ・「海外派遣」=「若手応援団」

2004 年 5 月、海外派遣報告会

- ・「造船・海洋技術の国際交流と社会貢献」

2005 年 11 月、秋季学会

オーガナイズド・セッション

- ・「発想が萌芽するとき—国際的萌芽研究の創成を目指して—」

2006 年 5 月、海外派遣報告会

- 
- ・「海外研究動向調査と研究インスピレーション」
- 2007年5月、海外派遣報告会
- ・「日本人研究者の海外における存在感」

テーマの趣旨：

グローバルな国際競争社会の中で我が国が主導的立場を取るために、世界的に存在感を示せる人材の育成が望まれている。海事関連分野においても、各種の国際研究集会や国際基準等の会議で我が国の存在感を示していくことが必要である。このような人材育成のために、秀でた研究が出来る環境を整えるのはもちろんであるが、若いうちに海外に出て多くの海外研究者と交流する機会を与え、将来のリーダと目される人々との親密な関係構築を助けることも重要である。今回のパネルディスカッションでは、この関係構築のために「国際学術協力に係わる海外派遣」がどのように役立っているのか、また今後どのように発展させればよいのかについてディスカッションする。

「日本人研究者の海外における存在感」についてのアンケート項目

[1] パーソナルデータ

・氏名／・所属／・調査テーマ

[2] アンケート項目

1. 今回の派遣先を選らんだ理由についてお聞かせ下さい。
2. 海事関連研究に関する海外研究者の存在感についてお聞かせ下さい。  
派遣先の研究者についてだけでなく、一般的に記入していただいても結構です。例えば、以下の点について意見を下さい。
  - a) どのような研究者は存在感があるのか？
  - b) 海外研究者に存在感を感じるか？
  - c) 日本人との違い
  - d) 日本人の存在感が薄いとすれば、それはどのような理由か？
3. 親密な関係の構築  
今回の派遣をきっかけにして、将来のリーダと目される人と親密な関係を構築する可能性についてお聞きしたいと思います。例えば、以下の点について意見を下さい。
  - a) 今回の派遣で将来のリーダになると思った人、あるいは若いですがすでにリーダとなっている人はいたか？
  - b) 自分とそれらの人に違いはあるか？（パーソナリティ、職場環境、社会環境など）
  - c) 親密な関係構築には今度どのような行動が必要か？（定期的訪問、滞在、学会出席など）
4. 日本の研究者へのアドバイス  
今回の派遣経験から、日本人、日本の研究者へのアドバイスがあればお聞かせ下さい。
5. その他、ご意見ありましたら、お書き願います。

話題1 今回の派遣先を選らんだ理由

- ・ 自分の現在の仕事・研究に活かすため。
- ・ 自分の現在の仕事・研究に関連する情報を得るため。
- ・ 実際のフィールドを持っている国を選んだ。
- ・ いままで繋がりがあまりなく動向が分かり難い国を敢えて選んだ。

## 話題2 海事関連研究に関する海外研究者の存在感

### a) どのような研究者は存在感があるのか？

- ・ バランスの良い人、自信を持って発言している人、話題の豊富な人、最後までやり遂げる人などに存在感を感じる。

### b) 海外研究者に存在感を感じるか？

- ・ プレゼン能力や政治力などで存在感を感じる。

### c) 日本人との違い

- ・ 日本人との根本的な違いはないが、議論の仕方などには多少の差を感じる。

### d) 日本人の存在感が薄いとすれば、それはどのような理由か？

- ・ 研究者・技術者としての資質ではなく、その他の部分の問題。

総評としては、日本人と海外研究者の間にそんなに大きな違いを感じない。

## 話題3 親密な関係の構築

### a) 今回の派遣で将来のリーダになると思った人、あるいは若い人がすでにリーダとなっている人はいたか？

- ・ 30代から40代前半でプロジェクト外のリーダになっている人もいた。

### b) 自分とそれらの人に違いはあるか？（パーソナリティ、職場環境、社会環境など）

- ・ 職場環境、海外経験などで差があるかもしれない。

### c) 親密な関係構築には今度どのような行動が必要か？（定期的訪問、滞在、学会出席など）

- ・ 共同プロジェクトの実施や、情報の提供など実質的メリットがお互いにある交流を続けるのが良い。

## 話題4 日本の研究者へのアドバイス

- ・ 若い間に海外でいろいろな経験を積む
- ・ 長期の渡航で共同プロジェクトに加わる

## 総括：

今回のテーマは海外との交流ネットワークを通して我が国の意見を国際的に堂々と表明できる存在感のある研究者についてであったが、派遣者たちは、古い世代の人たちにくらべると言葉の壁など海外研究者に対するコンプレックスも持っておらず、将来は国際的に存在感のある研究者・技術者へと成長していくことを予感させる若者ばかりであった。また、この海外派遣のプログラムが相手先機関からも良い評価を受け、国際的人材や交流ネットワークの構築に大変有意義であることも分かった。一方、彼らの資質の他に現在の我が国が抱えている制度的な問題や環境に関する問題も指摘された。それらは、このプログラムの改善の範囲を超えるものかもしれないが、それらの問題を一步一步解決していくことが我々の責務であると感じさせられた。